たまシネマ通信　2016年7月15日発行

TAMA CINEMA 通信

TAMA CINEMA FORUM
TAMA映画フォーラム実行委員会　〒206－0025 多摩市永山1－5　ベルブ永山（永山公民館内）
代表：042－337－6661　直通：080－5450－7204　http://www.tamaeiga.org/

特別上映会 7/16 ベルブホール（ベルブ永山 5F 京王永山駅･小田急永山駅下車徒歩約２分）

風の波紋

（小林 茂監督作品）
2015 年 /99 分 / カラー / 日本

上映スケジュール

① 10:30 ― 12:09
② 13:00 ― 14:39
③ 15:30 ― 17:09
④ 18:00 ― 19:39

©カサマフィルム

チケット

前売	大人	（中学生以上）	1,000円
当日	大人	（中学生以上）	1,200円
	子ども	（4歳～小学生）	600円

（TAMA 映画フォーラム支援会員、障がい者とその付添者１名は当日 600 円です）

＊全席自由席・各回入替制
＊開場は各回 15 分前
＊上映時間は変更になる場合があります。

企画者からのメッセージ

越後妻有の里山。背丈の倍ほども積もった雪を掻き続ける冬。都会から移り住んだ木暮さん夫婦を軸に、細部まで行き届いた映像が里山の日常を描き出していく。

自然と共に生き ていくということが声高な主張ではなく、協働で萱の屋根を葺く人びとの声の掛け合いであったり、田んぼの泥に足を取られながら苗を植える田植えの笑い声であったり。憧れる田舎生活があるわけでは無く、ただ実感の伴う生活があるだけだ。

都会からの移住者の木暮さんの悪戦苦闘にゆったりと関わっていく周りの人たち。なかなか一筋縄ではいかない面々の存在感が映像に厚みを与えている。

「私たちが忘れてしまった人間の営みの確かさがそこには有る」と使い古されたフレーズでまとめることは容易いかもしれない。しかし、そんな陳腐な感想をも風に飛ばしてしまう、ごつごつした節くれの風が全編に吹きわたっていく。

生きていくこと。雨露をしのぐこと。命を食べていくこと。他者と関わること。自然と折り合いをつけていくこと。生まれること。死んでいくこと。毎日を続けていくこと。山羊のたたきを食べながら歌う歌が、田舎の伝承歌と思いきや、バリバリのロシア民謡。3.11 の震災で傾いた家を戻す棟梁の指示の素敵なアバウトさ！ 都市と田舎との対極構造が見事に裏切られる。新たな生活の営みの描写。今日もまた、ごつごつした風が吹きわたっていく。

（竹内 昇）

特別上映会特設ページ http://www.tamaeiga.org/special/kazenohamon

cinema review

実行委員のおススメ映画コーナー

『クリーピー』（黒沢清監督 / 2016 年）

夫婦が奇妙な隣人によって深い闇に引きずり込まれていく恐怖を描いたサスペンススリラー。第 66 回ベルリン国際映画祭・第 40 回香港国際映画祭へ正式出品しました。原作の小説とは異なるオリジナルの展開なので、原作ファンの方も新たな視点で観ることができるのではないでしょうか。

“クリーピー” とは、「ゾッとするような」「気味の悪い」という意味。じわじわと「なんだかおかしいな」という感覚が広がっていき、そのおかしさが積み重なっていきます。面白いのがこの感覚を奇妙な隣人にだけではなくすべての登場人物に覚える点。登場人物全員がまさにクリーピー。みんな、どこかおかしいんです。

なんといっても隣人を演じる香川照之さんが素晴らしく、ただ怖いだけではなく、現実世界に本当にいそうなリアルさを醸し出しています。サスペンススリラーが好きな人、映像美を堪能したい人に特におすすめします。

（志賀麗香）

『ヴィオレッタ』（エヴァ・イオネスコ監督 / 2011 年）

監督の幼いころの実際の経験に基づいた自叙伝的な作品。めったに帰ってこない母を待ちわびている少女ヴィオレッタ。そこへ帰ってきた母は自分は写真家だと明かし、ヴィオレッタにモデルにならないかと誘う。母に好かれたいヴィオレッタは素直に引き受けるが、母の要求は過激なものへエスカレートしていく。

この映画でヴィオレッタの母アンナは撮影の際に娘に裸になるように要求する。行き過ぎた異常な行動に思えるかもしれない。しかし、アンナのように誰かを支配したいという気持ちを持っている人は意外に多くいるのではないだろうか。そういった意味で普遍的で倫理的なテーマの作品になっていると感じた。

ヴィオレッタは母に子供時代を奪われた現代の小さな大人だったように思う。彼女がどうこれからの人生を生きていくのか、ラストシーンが印象深い。また、写真家の母の撮る世界観やファッションも興味深く楽しめる。なによりも主演のアナマリア・バルトロメイが可愛いくて見入ってしまう。　（矢野緋奈子）

『私たちのハァハァ』（松居大悟監督 / 2015 年）

映画のタイトルから、こんな映画を想像できなかった。

田舎に住む女子高生四人組が、人気バンド「クリープハイプ」のライブへ行くために、福岡から東京へ自転車で行く旅を描いた青春映画。

この四人組を演じるのは井上苑子、大関れいか、真山朔、三浦透子。なかでも、三浦透子の演技が最高にいい。ほか、若手実力派俳優の池松壮介、中村映里子も出演しており、存在感はさすがである。

思い立ったら即行動。勢いのある四人。くだらないことで笑いあったり、本音を言って喧嘩したり。そんな仲間っていいですよね。そんな青春時代にもう一度戻りたい！と思わずにはいられない。

手持ちカメラのシーンも多くドキュメンタリーなのかと思うくらい四人の演技が自然体である。クリープハイプも本人役で出演している。

映画が終わる頃にはこの四人組と同じくらいクリープハイプに夢中になり走りだしたくなる。（大山瑞生）

『耳をすませば』（近藤喜文監督 / 1995 年）

中学 3 年生の少女が恋愛や進路について悩みながら答えを探していくガール・ミーツ・ボーイもの。多摩市の聖蹟桜ヶ丘を舞台のモデルとしており、当地では本作にちなんだイベントもしばしば開催されているため、近隣在住者の間における知名度は世間一般よりも高いと思われる。

この手のフィクションとローカルな現実世界とをリンクさせたいわゆる「ご当地もの」は、今でこそ地域おこしなどを通じて普及しているものの、期せずしてその流れを先取りすることになった。原作が少女マンガということで、ストーリーとしては良くも悪くも「王道もの」であるといえるかもしれない。しかしながら、スタジオジブリの手によって描かれた自然と建築物とが見事に調和した街並みは一見の価値あり。ここだけの話、後に上京する際に私が住まいを聖蹟に決めたのも本作の影響によるところが大きい。

観賞後は劇中世界と対比させながら当時の面影を残す聖蹟の街を散策されてみてはいかがだろうか。

（中原章智）

『スクールガール・コンプレックス～放送部篇～』（小沼雄一監督 / 2013 年）

毎年やってくる夏なのに高校時代の夏は三回きりなのだ。これがどれほど貴重なことか当時の私に言ってやりたい。

この映画はフォトグラファー青山裕企の代表作スクールガール・コンプレックスが原案となっている。写真集でみせる女子高生独特の無防備で危うい姿を映画でも細かく反映させている。

『スクールガール・コンプレックス』は高校最後の芸術祭に向けて準備をしていくなかでまきおこる放送部員の恋をえがいた青春映画である。

まずこの映画の特徴として、顔や体全体を映さず口元やスカートからのびる脚だけと、それぞれのパーツから浮かび上がる少女らしさを丁寧に切り取っている。作中には太宰治の女生徒がつかわれており、客観的な少女の美しさと内面的な自意識の揺らぎが見事に表されているため、高校生独特の空気感を思い出させてくれる。

今話題の森川葵や門脇麦の制服姿がとてもかわいい。苦い青春を送った人にこそ観てもらいたい作品だ。

（北野みき）

『君の名は。』（新海誠監督 / 2016 年）

パッと飛び込んでくる光、光、光。リアリスティックな映像と心躍る音楽の融合に、開始３秒でもう夢中だった。ネットで見た予告篇から心をグッと掴まれた感覚があったのだが、RADWIMPS の音楽がとても良い。歌で映画をすべて語らない、程よい距離で寄り添っている。こんなに映像と音楽が一体となったアニメーションがあるだろうか。

山奥の田舎で暮らす女子高校生と、東京で暮らす男子高校生がお互いに入れ替わった夢を見るところから物語ははじまる。思春期の葛藤、そして 3.11 や熊本、原爆との繋がりを感じさせるような、時空を超え文化的価値のある青春映画だ。

なにより神木隆之介が演じる入れ替わった女子高校生役がとてもかわいい。「入れ替わり」という非現実的な出来事であるが、普段何気なく流れている景色や出来事が繊細に描写されているため、もしかしたら私にも起こりうるのではと期待してしまう。

（都築彩花）

『人のセックスを笑うな』（井口奈己監督 / 2008 年）

この映画は劇毒だ。映像も、物語も、登場人物も、すべてが強烈な毒だ。20 歳のときに観て死にかけた思い出が今でも鮮烈に蘇る。

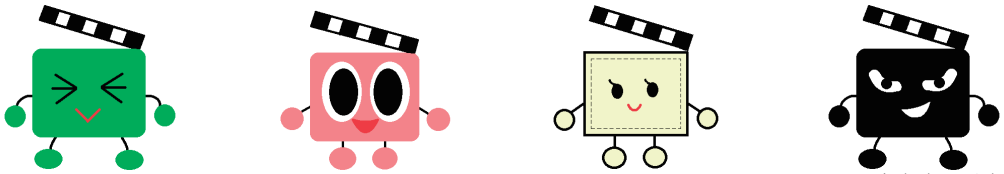
山崎ナオコーラの同名小説を井口奈己監督が映画化。美術学校に通う 19 歳の“みるめ”（松山ケンイチ）は、39 歳の非常勤講師“ユリ”（永作博美）と恋に落ちる……という物語。

本作のなにが凄いって、私はそれを映画の奇跡だと思っているが、現実から隔離された男女 2 人だけの異空間を完璧に撮っていること。ひたすらにこねくり合うあのダラダラを画面から感じたとき、ホントに心臓が止まるかと思った。そして、永作博美（たまに蒼井優）は悪魔だ。世の男は死にたくなければ不退転の覚悟で観なければいけない。

ラストカットのあの言葉と、エンディング曲・HAKASE-SUN『MY LIFE』が、最大級のエモーションを生み出す。暖かく包み込まれながら、止まらない胸の鼓動。

「恋におちる。世界がかわる。」この毒は一生抜けきらないようだ。

（富山有樹）



かちんこくんファミリー © TCF

6月11日（土）特別上映会レポート

Happy Hour ハッピーアワー

6月11日土曜日、今年４回目となる特別上映会をベルブホールにて開催し、『ハッピーアワー』（濱口竜介監督作品）の上映を行いました。ロカルノ国際映画祭での主演女優賞受賞など国内外から高い評価を集めている本作は、主演を務めた４人の女性をはじめとして演技経験のない俳優をキャストに迎えた上映時間全５時間１７分という異例の作品。上映会当日はそんな話題作をお昼過ぎから夜にかけて一気に上映いたしました。

普段の特別上映会では１本の映画を１日３～４回上映しておりますが、今回は１日で１本限りの上映。観客の皆様にも普段以上の時間を費やしていただくことになるということで、私たちにとってもチャレンジだったのですが、当日は老若男女の多くの観客の皆様にご来場いただき、同じ場所で同じ体験を共有したことによって生まれる素敵な一体感につつまれる一日となりました。

（宮崎洋平）

8月特別上映会
8/27㈯
ベルブホール

夏をゆく人々

（アリーチェ・ロルバケル監督作品）
2014年/111分/カラー/イタリア

次回上映作品は、2014年第67回カンヌ国際映画祭グランプリを受賞したイタリア映画『夏をゆく人々』です。どうぞお楽しみに！

※詳細はホームページをご確認ください。

お知らせコーナー

第26回映画祭 TAMA CINEMA FORUM

2016.11.19㈯～11.27㈰］開催予定！

現在は映画祭でどんな企画をしようかと案を練っている段階です。

今年はどんな映画が上映されて、どんなゲストが来場するのか…。そして第8回目を迎える日本で一番早い(!?)TAMA映画賞はどんな作品・受賞者に贈られるのか。皆さん、どうぞお楽しみに！

TAMAシネマ隊募集 ！

TAMA映画フォーラム実行委員会は、2015年11月21日～11月29日に開催予定の第25回映画祭TAMA CINEMA FORUMをサポートするたまシネマ隊を募集します！

説明会は10月9日（日）、10月25日(日)の各15時からを予定しています。

応募方法などの詳細は後日ホームページの方で発表いたします。

支援会員制度のお願い

当映画祭を一緒に支えて頂ける支援会員を募集しています。映画を「観る人、観せる人、創る人」の交流の場づくりを通じた、地域と日本映画界の活性化に向けて、資金面でサポート頂けませんか。ご支援頂いた方には特典をご用意していますので、ぜひご協力をお願い致します。

［支援金寄付　個人会員］
一口1000円

郵便振替番号　00160－5－541123
加入者名　TAMA映画フォーラム実行委員会
（ご不明な点はお問い合わせ下さい）

特典①：映画祭チラシ送付
特典②：映画祭パンフレット贈呈
特典③：特別上映会割引（当日チケットを、支援会員特別価格に。上映会は２～８月の間に４～５回開催予定）

※その他特典もご用意する予定です。

TAMA映画フォーラム実行委員会ホームページ　www.tamaeiga.org

@tamaeiga（最新情報をフォロー）　**www.facebook.com/tamaeiga**（facebookページに「いいね！」で参加）

たまシネマ通信　July 2016　Issued by *TAMA CINEMA FORUM*
Editor in Chief　*O. Yoshino*　Editorial Design　*F. I*　Contributing Editors　*TAMA CINEMA FORUM Staff*
禁無断転載